

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 荒木 裕行

本論文は、17世紀末から19世紀半ばにおいて藩と江戸幕府とがどのような関係にあったのかを、両者を媒介するシステムやそれに関わる人びとの活動に注目して解明した成果である。

序章では、研究史を簡潔に整理し、論文の目的と構成を述べる。

第1部「藩・大名の政治ネットワーク」では、藩・大名が幕府役人や他大名との間で取り結んでいた関係を論じる。第1～3章では、諸藩が幕府役人に、情報提供や相談を内々に受けることを依頼する「御用頼」について検討する。1709年、老中に御用頼を依頼することは禁止されたが、藩側は引き続き「御内用頼」として関係を結んでいた。第1・2章では中期の金沢藩と後期の鳥取藩を事例に、時々最高実力者を御内用頼とする傾向があったこと、実際には多分に形式的な関係になっていたが、幕末には重要性が増したことが示される。第3章では、天保改革期に下級役人が御用頼となることを幕府が規制し、付届け等の費用を抑えたい藩側もそれを求めたが、幕臣側は役得維持のために反発したことを明らかにする。幕藩関係も彼らの存在によって円滑に運営されていたため取締りは不徹底に終わったと指摘する。第4章では1820年代、古河藩御内用役による藩主の地位上昇をめざす贈賄活動を、第5章では19世紀半ばに至る会津藩主松平容敬の交際を、それぞれ政治状況のなかで検討し、大御所時代の権力構造、対外的危機の高まりをうけた大名グループの幕政参加の動きにも言及する。

第2部「幕府の支配機構」では幕府側の支配システムを論じる。第6章では、京都所司交代時に老中が上京して新任者に職を引き渡す慣習を検討する。これは所司代の引継ぎに由来し、朝廷対応等の意味をもちつつ18世紀前半に儀礼として定着したが、その後も政治的な機能を果たすことがあった。その一例として1850年に上京した老中が株仲間解散令の影響を調査した結果、株仲間が再興されるに至ったと第7章で指摘する。第8章では、天保期に近江水口藩でおきた家中騒動を紹介し、その数年前に但馬出石藩でおきた仙石騒動の影響をうけて表向きの扱いはされなかったが、実際には幕府老中などが介入していたとする。補章では、幕府が家中騒動を抑止するため日常的に武家家中の動静を調査・探索していたことを示す。第9章では目付の職掌を具体的に明らかにする。

終章では全体をまとめ、幕府・藩双方が相互の関係を円滑にするための仕組み・回路を築き上げていたこと、そうした回路の一部が嘉永期以降、政治的に重要なものに転化することが展望される。

以上のように本論文は、藩や幕府役人の多様な史料を博搜し正確に解釈・評価して、研究の乏しい近世中後期の幕藩関係を論じ、両者を取り次ぎその関係を円滑にする存在について精緻に実証した。全体のまとめや意義づけがやや淡泊で、第2部が体系的でない等の不満もないわけではないが、それは今後の研究に俟ち、高い実証水準と、多くの新知見をもたらした成果とに鑑みて、博士(文学)を授与するに相応しいと判断した。